
隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第119号

-原田勉から引継いだ環境・農業・食べ物など情報の交流誌-

2003.10.09 (木) 発行 山崎農業研究所&編集同人

<新キーワード>

環境・農業・健康・食べ物などの情報提供、高齢者と若者、農村と都市の
交流ミニコミ誌。山崎農業研究所&『電子耕』編集同人が編集・発行。

http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_index.htm

*****発行部数 1681 部*****

□ 目次 □-----

<今週の提言>生物多様性と地産地消 渡邊 博

<読者の声>丹羽さんから：小澤さんから

<舌耕のネタ>悪の連鎖を断ち切れ・農作物（農業）を守る闘い 原田 勉

<山崎農業研究所情報>

◇『21世紀水危機—農からの発想』を読む（その3） 田口 均

<元気な農業・元気なくらし・7>

いま「食育」で大切なことは？（下） 農文協・栗田庄一

<丹羽敏明の戦争体験>19、演芸部誕生の苦しみ

<日本たまご事情>鶏卵 Q熱 人間の病気？ 愛鶏園・齋藤富士雄

<編集同人の近況報告>9月25日～10月8日

<今週の提言>生物多様性と地産地消

最近、口蹄疫に関する調査を行う機会を持った。口蹄疫といえば、狂牛病と同様に英国での発生がとくに有名であり、その規模、被害の大きさは群を抜いている。ナショナルトラストの取り組みに見られるように、環境保全に熱心な英国でなせもこのような家畜疾病が蔓延するのであろうか。

調査を進めていくうち2つのキーワードが浮かんできた。生物多様性と地産地消である。生物多様性の維持とは、生物種が相互に影響しあって生態系の健全な平衡状態を保つことである。これが崩れ、特定の種が突出するようなことがあれば、病虫害や疾病の異常発生を引き起こすことになるのは想像に難くない。

この地球上に生息する生物種は3000万種とも5000万種とも言われるなかで、

農業として生産されている種は極めて僅かである。そのわずかな種が地球を席卷しているとなれば、現代農業は生物多様性にとって大きな脅威である。その脅威をいっそう加速させているのが、地域農業をことさら単純化、少品目化に追い込む農業のグローバリズムである。

地産地消、スローフード、スローライフ。なんとも情緒的な響きで、世の中そんな甘いものではないという声が何処からか聞こえてきそうである。情緒的でも、観念的でもよいではないか。地産地消は生物多様性にマッチングした農業を市民レベルで担保する、最も堅実な『文化』である。

英国では、こと農業となるとなぜか環境とは別のところに置かれているようである。数多くあるグランドワークも、農業と環境を結びつけた運動はほとんどみられない。英国における口蹄疫、狂牛病の蔓延は、畜産を主体とした典型的な『生物単一性農業』が招いた当然の帰着であるといっは言いすぎであろうか。

渡邊 博

太陽コンサルタンツ（株）

h.watanabe@taiyo-c.co.jp

<読者の声>

●10/01 丹羽敏明さんから：

118号の配信有り難うございました。農作物の盗難事件が相次いでいますが、私も小学生の頃、米作りの田の草取りで背中が二度も剥け、収穫時には星がまだ出ている早朝から稲こぎに精出した経験があるので盗人野郎に激しい怒りを覚えます。ただし川遊びに飽きて周辺のトマト畑のトマトを失敬した犯人は私達がき大将でしたが、見つかって『いっぱい食って行けや』と大目に見てくれたものです。お礼に畑の草取りをした思い出があります。現代みたいに小型トラックで盗み出すような悪質な泥棒は当時はいませんでした。そんな悪事がはびこらない世の中にしてほしいと、いまの政治家に願わずにはいられません。

「虜囚のうた」のつづきを御紹介します。作者名は省略します。

『ふるさとの便りなつかし幾十度出して読みしか端はちぎれし』
『時待たば帰り得る日もあらなむと装具拵げてじっと見つめり』
『虜れの身にうたたねの雨寒くねむれぬままに恋ふるふるさと』
『ひねもすを赤土まみれ作業して居並ぶ帰路のみじめなるさま』
『日盛りに車ひきゆく翁あり故郷に老いし父母をしのびぬ』
『針ほどの言葉尻とらえて憤るすさみたるわれさみしく思う』
『痛み伏せる吾が枕辺に交々に戦友のなさけの煙りたえなし』
『すぎし日の誰がたわむれぞ支那人の児等吾を見てバカヤロと呼ぶ』
『内還の希望遠のき疲れし身思い悩みて夜空見渡す』
『吾子に似る年いとけなき児をみれば父としわれの心よみがえる』
『過ぎし日の戦に散りし友の家に我は帰りて何と伝えむ』
『幾年か途絶えて淋しそのかみの玉の柔肌触れし黒髪』
『傷つかば帰れるものと思うたび五体を受けし父母に詫ぶ』
『空晴れて八州の庭に帰りなば原子爆弾の跡耕さん』
『為すべきは為して砕けし敷島の大和男の子や何惜しむべき』
『三枚のビスケットさえ食べのばす胃袋のありて羨（とも）しかりけり』
『六十路越す父母は日々野良に出でひたすら吾の帰りを待つらむ』
『遥かなる北斗の星のその下に吾がたらちねは無事にいますや』
『父母の写真とり出し新年の挨拶を告ぐ故国を偲びて』
『楽しきは一日の作業無事に終え戦友と団欒の飯を食すとき』
『久に来し便りなつかし妹は拙き文字にて兄を励ます』
『桜咲くまでに帰れと母上の夢の笑顔やさめて淋しき』
『烈日を避くべきもなき労役にふき出でし汗のひからびて白く』

●10/04 小澤 量さんから：

▼無洗米について

最近ブームも一段落している無洗米ですが、「全国無洗米協会」ではあらためてPRを始めたようです。今度は、LCA（life cycle assessment）による分析を利用して「第三者機関（土壌協会）が無洗米の環境改善効果を確認」と謳っております。この分析についての話しは別にしたいと思います。

私の店では無洗米は取り扱っておりません。今まで販売したことはありませんし、今後も販売するつもりもありません。店先でもたまたま「何故無洗米を置か

ないのか」聞かれることがあります、だいたい以下のような理由だと説明しています。

第一に、鮮度の落ちが早いことです。これは、国民生活センターの分析でも明らかになっています。

第二に、味が落ちることです。無洗米のほうが美味しい、というPRもありますが、業界で信じている人はまずいないでしょう。自分が積極的に無洗米を食べているという米屋や米卸の社員にお会いしたことはありません。

第三に、中身や精米日が保証できないことです。というのは、質の高い無洗米設備は高額で、小売には到底買える機械ではありません。そのため取引卸が無洗米設備を所有する工場に委託したお米を仕入れるなど流通が眼に見えません。そのようなお米では、自信を持ってお客様におすすめするわけにはいきません。

第四に、「研ぎ汁が出ないから環境に良い」とPRされていますが、その点も誇張や嘘に近い部分が多く、それを知りながら販売することは到底出来ません。このことは、以前電子耕 80 号で紹介しました。

<食品情報>無洗米への疑問を提起 (てんち米店)

<http://www.nazuna.com/tom/020404musenmai.html>

第五に、一番売れている無洗米用設備は中身がわからず、毎日食べていただくお米の設備としては信用できないからです。

無洗米を販売している小売でも、品揃えの一つとして置いているところが多く、置くのはいやだが、無洗米がないからとお客様に帰られるよりまだ、というのが実情です。中には、「無洗米あります」と看板を掲げて、無洗米を買いに来店されたお客様には、「まずくて不評なので、次の仕入れを見合わせているところです」と説明して、普通の精米を販売する猛者もいます。

私の店でも、「ないの、それじゃいいわ。」と帰られたお客様も数人ありました。自分の理念に正直に生きるドンキホーテの辛いところですが、自分に嘘をつきたくないなので、やせ我慢しております。

有限会社てんち

<http://www5e.biglobe.ne.jp/~tenchi/>

<舌耕のネタ>悪の連鎖を断ち切れ・農作物（農業）を守る闘い

前の号で農作物の泥棒は生産者の苦労や愛着を踏みにじる許し難い悪事だ。『電子耕』の読者の皆さんは、どうお考えか？と訴えた。

しかし、反響は丹羽さん一人だった。

しかも、コメ泥棒は全国各地に広がり「悪事千里を走る」になってしまっている。警察も「コメ泥棒ぐらいでは動かない、被害届をしても聞き取り調査さえしてくれない」という農家の不満の声がある。千葉県警察でコメ泥棒に暴力団が関与という報道があったが、これも基をただせば別件で逮捕された男がコメの窃盗を供述したから判明したという。

コメに続いて、次は高級品の有名ブランドのリンゴやキノコなどあらゆるものに波及するだろう。農村は狙われていると言っても言い過ぎではない。

日本農業新聞によると、コメ泥棒の狙いは「関東」「コシヒカリ」という。関東米産地のコメの集荷率は3割前後と東北の8割に比べて格段に低い。これは農家の倉庫にコメが保管されているということ。だから泥棒は倉庫のコシヒカリだけを狙うという。防犯が遅れている地域ほど狙われ易い。米の生産や流通、価格にも詳しい犯人像が浮かび揚がってくる。

こうした悪の連鎖をいかに断ち切るか。

農家やJA・農協でも納屋・倉庫の施錠や盗難保険で対応しているところも増えてきた。地域全体が自警団を組織して見回りを始めた所もある。

見えない敵と闘う方法は、都市の「空き巣対策」や「落書き対策」と同じく防犯パトロールや落書き消しに取り組む人たちを見習う必要がある。

そして、近く行われる選挙に「農作物・農業」を守る人をいかに選択するか。現状の政治家や警察が当てに出来ないとすれば、道路や橋を作る候補者ではなく、不正・悪行を糾すモラルを堅持する人。大企業の悪徳不正を許さない人。

国の未来は希望ある農業からという人を選びたい。

原田 勉

<http://nazuna.com/tom/>

<山崎農業研究所情報>

◇『21世紀水危機—農からの発想』を読む（その3）

——香川県における近代的水利施設と伝統的水利用
平六渴水の経験から／長町 博

農業が自然の影響を大きく受ける産業であることは論を待たない。今年は10年ぶりの全国的な冷害であるし、さる7月に山崎記念農業賞を受賞した宮古農林高校のある沖縄県宮古島では、台風14号により基幹作物であるサトウキビに大きな被害が出ている。北海道日高地方を襲った台風10号や、東北・北海道地方の地震の被害も記憶に生々しい。

元香川用水土地改良区事務局長の長町氏がいまから9年前、1994年に直面したのが「平六渴水」である。この年、香川県の7・8月の降水量は観測史上最少を記録した。農業用水のみならず、工業用水や一般の生活用水との配分をどうするのかという深刻な問題が発生したのである。

香川県は全国でも有数の溜池県である。溜池が多いのは、平野が占める割合が高く、水源としての山が浅いことによる。古来この地域の人びとを悩ませつづけてきた水不足を解消するため、1968年に着工、1981年に完成したのが香川用水であった。この近代的な水利施設である香川用水と歴史的インフラである溜池が相補って地域の水需要を満たしているところに香川県の特徴がある。

農業用水だけでなく、上水道用水や工業用水も供給している香川用水では、平六渴水に際して傾斜配分が行なわれた（計画取水量に対して農業用水が59.6%、上水道用水が83.2%、工業用水が45.8%）。この利水者間での融通によって30万都市高松は5時間給水を保ち、パニックにおちいらずにすんだが、農業用水はかつてない厳しい水管理を求められることになったのである。

この渴水において力を発揮したのが伝統的な節水灌漑であった。その基本

は、一定の順序と時間に従って田んぼに水を入れる「番水」に基づいた「走り水」である。「走り水」とは田んぼに水を湛えるのではなく、水を走らせて湿らせる程度に配水する技法を指す。そして、時計を使って配水時間を制限する「時間水」や、田んぼのいちばん高いところに立てた目印に水が到達した時点で配水をうちきる「走りつき」灌漑、配水中の損失を最小限にするための夜を徹しての配水「夜水」などが行なわれた。

平六渴水において生活用水がなんとか維持できた背景には、近代的な香川用水を補完する、このような農家の懸命の努力があったのである。長町氏は言う。

「水の有効利用は何かと煎じつめていくと『節水と融通』に行きつく。そのことが平六渴水で学びとった貴い教訓である。節水に節水を重ねその上でなおかつ危機に直面しているところを救済するために『乏しきを分かち合う』。それが節水と融通である」

人智を超える自然災害はたしかにある。しかし、最悪の場面を避けるためにできることは、そのために人びとが協力し合える余地はあるだろう。幸いなことにこの年、香川用水の受益地では平年作を上回る収穫を得ることができたという。自然と人間の関係があらためて問われている現代において、平六渴水の経験は大きな示唆を与えてくれる。

田口 均
山崎農業研究所会員、編集者
y.noken@taiyo-c.co.jp

香川用水土地改良区（水土里ネット香川用水）

<http://homepage3.nifty.com/kagawayousui/>

『21世紀水危機—農からの発想』の内容・構成はこちらから

<http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/book/03wadai008.html>

本のご注文は山崎農業研究所へ

http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_index.htm

<元気な農業・元気なくらし・7>いま「食育」で大切なことは？（下）

都会に住む人の大半は、本人ないしその親が地方の出身者だろう。都会の住民には、大なり小なり、田舎からのおすそ分けがある。

山形の81歳の母が漬け込んだ梅干し。庭にある1本のウメが、毎年たくさん実をつけてくれる。これは「ウメ切らぬ馬鹿」とか言って、近くに住む弟がしっかり枝を整えてくれるせいでもあるのだが、今年も大きな粒になった。雨が続いて、土用干しがうまいかなかったの、ちょっと柔らかいけど、と断りがついてコーヒービン入りの梅干しが届いた。

塩分20%。これでも昔よりは減塩だそうだが、かなりショッパイ。ほんの少し、1粒の3分の1ほどが、わが愛妻弁当のご飯の上に載っている。ピリッと酸っぱくてうまい。これを食べると市販の梅干しはとても買う気がしない。

母の庭での小さな農業。その思いは農家と同じ。自分も食べる安心な食べ物をつくる喜び、消費者（としての我が子・知人）に食べてもらう喜び。

こころが癒されるおふくろの味。食の安心は、作り手の情報、おいしく食べるための生産加工への思いとその仕事ぶりが伝わることから始まる。ホンモノの食のおすそ分けのネットワークを広げたい。「産直」「地産地消」など、作り手との情報の結びつきが深いほど、食の安心の土台は強固になる。

そして、いま大切な「食育」とは、ホンモノの食への感性をみがくこと。

この春、農文協にも20人ほどの大卒新人が入ったが、信州の山の中で行なった新人研修で、驚いたことがあった。野菜は採りたてが一番うまい。とくに、エダマメやトウモロコシは、朝早く収穫したとりたてをすぐにゆでて食べるのが一番うまい。八百屋に並んでいるのは、すでに味が落ちている。中国産の冷凍エダマメなどは、格好だけのエダマメであると話したら、その味の違いを知らない新人が複数いた。採りたてを食べたことがないという。

ホンモノの食への感性をみがくには、ホンモノの近くに連れてこなくてはならない。ホンモノの味を体験させなければならない。

できればホンモノを育てる体験をさせたい。汗して育てた作物は、ふだんきらいな野菜でも、食べてしまうから不思議だ。農業はもちろんラクな仕事ではないが、楽しいことも多いことを知らせたい。

改めて「食育」のネットワークをつくること。消費者だけでなく、作り手の農家と「食べる人」をつなぐこと。これは、ホンモノのおすそ分けのネットワークでもある。

とりわけ大事なのは、作り手も含めて、女性のネットワークを「学校区」の単位でつくること。まず、学校給食を「地場産給食」に近づけること。地元の農業・農家の産物を、給食という「子どもたちの暮らし」の場に近づけること。これをきっかけに、子どもたちを農業の場につれだす、田んぼや畑につれだして、食べ物が生きて育っている場、いのちにふれさせること。

都市化した地域にもまだ農家はいる。都会の農地が足りないといわれたときが、「食育」がしっかり地域に根をおろしたときだろう。

(社) 農山漁村文化協会 提携事業センター所長

栗田 庄一

〒107-8668 東京都港区赤坂 7-6-1

TEL.03-3585-1144 FAX.03-3585-6466

<http://www.ruralnet.or.jp/>

kurita@mail.ruralnet.or.jp

<丹羽敏明の戦争体験> 19、演芸部誕生の苦しみ

栗田まさみ氏の著書から演芸部誕生の苦労話を抜粋する。

『演芸部結成と演芸場新築のための協力を呼びかけた会報が出された翌日、作業を終わって門を歩いて来る隊員達は、手に手に小さな板きれ、丸太、煉瓦、布切れ、馬の毛、とうもろこしの毛、現地娘の使い残しの白粉、紅、コード、古釘、壊れたソケット、ひびの入ったレンズ等々、我々の想像もつかない種々雑多なものが持ち込まれた。

広場の片隅にあらかじめ指定場所を設けて受け入れたがたちまちうずたかく積まれていった。あの一つ一つの品を私は今でも忘れない。こんなに人間同志が一つの目的のために協力する姿を、戦争中の軍隊でも内地でも見たことがなかった。こんなに感動を覚えたこともない。演芸部の結成と演芸場の新築に寄せる八千人の期待が胸にせまって夜の更けるのを忘れて材料集積場の前に立ち尽くした。

隊員の演芸場を作るという熱情は日増しに高くなり、広場の隅に引きも切らず、次から次へと色々なものが積まれていく。各隊から大工、建具等建築に経験のある者が集められた。どんな舞台を作るかを決めるのが大変である。意見百出、議論が議論を呼ぶ。口角泡を飛ばす始末である。それでもやっと凶面らしきものが出来上がると、今度は作業をどう進めていくかである。

皆昼間は決められた作業にでなければならぬ。作業終了後に作っていたのでは幾日かかるかわからない。隊員が熱望していることは、一日でも早く完成して自分たちの手が造り上げた舞台で、自分たちの仲間の演芸を見たいのである。本部の上層部の人たちは八千人の中から何とか一日5-6名の人たちをひねり出して、英軍の作業に出ないで朝から舞台造りにかけられるよう配慮してくれた。しかし指定された建築関係者は作業に出るよりもっと苦勞したと思う。

それは朝から作業にかかって夕方各作業隊員が帰って来ると、幾人、幾十人となく集まって来て舞台造りに協力する。それらの人たちと一緒に夜も遅くまで努力しなければならない。朝7時頃から夜12時頃までほとんど休む間もなく働きづくめである。しかもまとまった材料はない。丸太をつなぎ合わせ、板切れをぶちつけ、釘がなければ錆びた鉄線を切って釘の代わりに使う。こうして一日一日舞台の形が整っていく。奈落から通じるオーケストラボックスも作った。花道も出来上がった。監視のインド兵は器用にこれらの作業をなしとげていく日本兵に、最初は好奇の目で眺めていたが、いつかタバコをくれるようになったのは尊敬の念さえ持ってきたのではなからうか。

継ぎ接ぎだらけの舞台がその偉容を表しはじめた頃、部員の人たちもまた真剣に各々の役目に邁進していた。音楽関係者は作業に出てベニヤ板を拾い集め、バイオリンやギターを作った。ピアノ線を集めるのに苦勞して中には細い針金を使ったものさえある。米粒をねって張り合わせ最後にニスを塗る。これでもなかなか美しい音色が出て楽しませてくれた。照明担当者は波止場に転がっている探照灯を分解していろいろ持って来た。中には粉々に割れてひびの入ったレンズをゴムのりで張り合わせたものもある。欠けたソケット、反射鏡、ちぎれかかった電線、街のゴミ溜めで拾ってきたクチャクチャのセロハンを湯気で柔らかくしてベニヤとベニヤの間に挟んで重いものをのせてしわを伸ばしている。

衣装の係はこれまた大変である。大半が天幕のはしきりで生地が厚い。縫い合わせるのに苦勞する。手に豆をつくり天幕をほぐした糸で縫い合わせる。隊員が作業で特別に現地人の便所掃除などをさせてもらって、貰ってくるサロンなどは衣装係にとって涙の出るほど嬉しいものだろう。床山（役者のかつらを作る人）は銅の台金をどこからともなく手に入れて、馬の尻毛を一本一本差し込んでかつらを作る。現代用の断髪、お下げ、時代劇用の丸髷、桃割れ、島田、

武家、町人用のかつら。毛の足りないところは墨で染めた麻で補った。
夕べの帳がおろる頃、三々五々兵隊たちが広場に集まって来る。我々の作業を見るため、一日ごとに形を整え出来上がったいく劇場の姿に、どれだけ楽しみを抱き、翌日の作業への糧になったかは、あの苦しみを味わった人たちだけが知っていることだろう。』

<日本たまご事情>鶏卵 Q熱 人間の病気？

私は養鶏場をもうかれこれ 40 年ちかくやっているが不勉強にも「鶏卵 Q熱 人間の病気」との関係を知らない。

最近の一部の新聞、テレビによれば、誰かが無理やりに「鶏卵 Q熱 人間の病気」の危険性を煽り立てている。

日本、また世界中どこの国でも問題になってないことを、ことさら騒ぐ事によって利益になる連中か、売名行為であろう。

マスコミは食品の安全性についてならニュースになるのか、良く確かめもせず面白おかしくとりあげる。

あまりのえげつなさに日本養鶏協会を始め、9 団体が日本テレビに抗議した。

発端は 9/16 東京都の保健所に勤める医師が、その危険性を訴えてマスコミ相手に緊急記者会見をした。

組織の人が個人の立場で会見したのもおかしいが、その基礎となるデータも人さまの借り物とは恐れ入る。

内容は「調査した鶏卵の 6 %はQ熱病原体に侵されているから人間にとって危険だ」というものであった。

<http://www3.nikkei.co.jp/kensaku/kekka.cfm?id=2003091700919>

養鶏、鶏卵業界の Q 熱に対する公式見解は日本養鶏協会のホームページ

<http://www.jpa.or.jp/news/media/index.html>

にあるとおりで、「鶏卵 Q熱 病気」は大袈裟に騒ぐほどの関係はない。

齋藤 富士雄

(株) 愛鶏園

<http://www.ikn.co.jp/>

<編集後記・同人の近況報告> (9月25~10月8日)

伊豆七島の一つ、神津島を訪ねた。高速船で3時間足らずだが、自然も人情もこれが東京都かと思う。東京だと確認できるのは、車のプレートの「品川ナンバー」だけという感じ。

農業改良資金を借りて、農業で頑張っている6戸の農家のお話を聞いた。6戸とも借金の名義も経営の担当も女性の皆さんだった。偶然かと訊ねたら、島の農業は、かーちゃん達が担っているという。

皆さんの多くは、一度は島を離れ、赤い灯、青い灯の都会の生活を経験している。ある人は、成人式に戻ってそのまま島に居着いてしまった。また、ある人は、恋人同士お手々つないで花の都に就職したが、5年も経たずに島に帰ってきた。東京で会社員に嫁いだが、やっぱり島がよいと、夫まで口説き、共に島で農業を始めているご夫婦もいる。私は島を出なかったという女性は、若いうちダイビングのインストラクターだったが、今は切花栽培に精を出している。

農業は3K(きつい、汚い、危険)といわれるが、皆さんのお話から新3Kを教えてもらった。農業は、「気楽」で「健康」で毎日が「感動」だという。

「女性の元気は地域の元気」そのものだった。(山崎農業研究所・小泉浩郎)

◎お詫びのお知らせ

118号の「<丹羽敏明の戦争体験>18、演芸部の誕生の基礎」において、改行の挿入が不適切であったため、一部読みにくい箇所がありました。読者の皆様にお詫び申し上げます。

◎お願い「<読者の声>の投稿規定・メールの書き方」

1、件名(見出し)を必ず書いて下さい。「はじめまして」は省略して、言いたいことを具体的に。

2、氏名・ハンドルネームは、文末ではなく始めのほうに。

3、1回1テーマ、10行位に。

4、ホームページを持っている人は、文末にURLを。

5、JIS X0208 規格外の文字(機種依存文字)のチェックを。

<http://www.chem.sci.osaka-u.ac.jp/networks/check/jisx0208.html>

インターネットで使えない丸数字や半角カタカナ、括弧入り略号などは文字化

けの原因です。

◎投稿アドレス変更のお知らせ

電子耕への投稿アドレスは、発行人の変更に伴い、
y.noken@taiyo-c.co.jp
となっております。投稿される方はこちらのアドレスをお願いします。

次回 120号の締め切りは10月20日、発行は23日の予定です。

最後まで読んで頂き有り難うございました。今後もよろしくお願い致します。

★『メールマガジンの楽しみ方』発売中

書名：岩波アクティブ新書 45 『メールマガジンの楽しみ方』
著者：原田 勉 定価：本体 700 円＋税 発行日：2002 年 10 月 4 日
発行所：岩波書店 ISBN4-00-700045-X
まえがき・目次・著者紹介・注文方法はこちら
<http://nazuna.com/tom/book.html>

『電子耕』から大切なお知らせ

<http://nazuna.com/tom/denshico.html>

http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_mailmag.html

<本誌記事の無断転載を禁じます>

隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第119号

バックナンバー・購読申し込み／解除案内

<http://nazuna.com/tom/denshico.html>

http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_mailmag2.html

2003.10.09 (木) 発行 山崎農業研究所&編集同人

<mailto:y.noken@taiyo-c.co.jp>

***** ここまで『電子耕』 *****